「新たな連携・協働」を試みる際に注意すべきこと
ー自文化中心主義から考えるー

MUSULIN Ilja
ムスリン・イーリャ
立教大学

1. 文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性

日本で研究を行っている我々を含め、様々な意味で全世界の学問がアメリカを中心に公転していると言っても過言ではない。そこで我々も、宗教性のタイプや宗教信仰と精神健康、あるいは宗教とアイデンティティ、宗教と人格形成、宗教信念と幸福・死への不安・意味など、様々な問題を研究しようとする際、まず北米の専門誌に目を向け、そこでの問題提起や研究方法、成果などを確認する。

しかし、宗教に関して言えば、日本の宗教を研究対象にしつつ、アメリカなどの西洋研究者のアプローチや方法の真似をしようとする場合は、我々は大きな過失を犯さざるを得ない。何故なら、例えば、アメリカの研究の中で利用された質問紙や尺度の内容に従いながら自らの日本についての研究を組み立てる場合、「神」と書いただけで、（対象者が日本のキリスト教徒ではない限り）我々はすでにアメリカの研究者と相いれない結果を得る方向に向かっているからである。

1. 文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性

　西洋の研究者が宗教研究を行う際に頻繁にイメージするのは、人間の能力や道徳性をはるかに超える全知全能で完璧な道徳者の神である。北米心理学の論文にその神のことがGodと書かれるのは偶然ではない。その言葉を見れば、まず頭文字が大文字であることに気付くことができる。この書き方にはわけがある。神は非常に貴く、強力であり、人間とはかけ離れた存在であるため、最大の敬意を示す必要があるわけだが、その敬意を神という名詞を大文字で書くことで表すのである。それから、英語などの印欧語の名詞には単数形と複数形があるが、ここで単数形の名詞が使われている理由は神が一つしか存在しないと信じられているからだ。英語の名詞には性別がないので、Godと書いても信仰対象の性がはっきりしないが、名詞に性別が付くほかのほとんどの言語ではキリスト教の「神」は男性形になっている。

1. 文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性

つまり、異なる解釈をしている神学者や聖職者もいるとはいえ、西洋では神は人々からかけ離れた、人間をはるかに超える唯一の存在、そして男性としてイメージされ、信仰されることが多い。しかし日本では、動物も、木々や稲などの植物（の霊）も人間も自然現象も神に成り得る。

これだけ神概念が違えば、アメリカの研究者の尺度の中に出てくる神像、神との関係などに関する質問項目が日本で同じ意味を持ち、似たような研究結果を生み出すことは不可能である。

このことは、落ち着いて考えれば誰もが簡単に理解できるが、それにもかかわらず、我々はGodが中心となるアメリカの専門誌の調査紙や尺度をそのまま受け入れ、日本の現実を捉えきれない不正確で紛らわしい、もっと言えば、疑わしい研究に着手しがちである。**学問的に厳格で日本の文化文脈に忠実な研究を行うために、北米心理学における自文化中心性や両国の文化の違い、宗教信仰の多様性に関する意識が必要だと思われる。**

1. 文化の違いや宗教の多様性に関する意識の重要性

　というのは、宗教の多様性に関する意識が不足して自文化または自信仰に引っ張られてGodをあらゆる宗教信仰の原型あるいは本質として捉え、一神教を宗教全般と同一視するのが（一部の）北米心理学者が抱えている問題である。宗教心理学はプロテスタントの多い国であるアメリカで起こったものであり、北米の心理学者が自らの研究においてプロテスタント的な信仰を持つ対象者と接することが多く、心理学者の中には同様な信仰あるいはプロテスタント的な要素を含んだ宗教観を持つ調査官がいることを踏まえると、北米心理学においてプロテスタント的な発想を無意識か意識的に宗教定義や尺度などに反映した研究があることは不思議でない。

　だが、そのような概念を土台に据えた研究者の論文を宗教研究の権威として捉え、彼らの自文化中心的な考え方に基づいた研究手法や成果を日本に拠点を置く我々が無反省に、必要な変更を加えずに導入すると、文化的多様性に関する意識の欠如は我々の問題にもなる。知らず知らずのうちに偏った学問を輸入したということになるからである。

2. 日本における宗教概念について

近年、日本では「無宗教」というのは活発に論じられている。日本人が質問紙の項目に対し「宗教がない」と回答した場合はこれはどういう意味なのか、何の信仰もないという意味なのか、それとも、「特定の宗教に所属していない」または「特定の宗教を信じていない」という意味なのか。つまり、「無宗教」と名乗る日本人は果たして信仰がないのか。もしあるとすれば、それがどういうものなのか？また、これと関連して、日本人が「宗教」と言う際にこれは何を意味するかも検討されてきている。

そこで、一般の日本人は開祖を持ち体系的で組織された宗教である「創唱宗教」（例えば、キリスト教、仏教、イスラム教など）を「宗教」として認識しているが、逆に、（神道や祖先崇拝を含めた民間宗教のような）「自然宗教」を「宗教」として認識しないという見解が提示されている。あるいは、カルトや信仰に見られるようなコミット度の高い熱意に満ちた信仰や実践、頻度が高く、規範やタブーの多い実践こそ宗教であり、よりコミット度の低い参加は宗教ではないという概念も日本人に浸透しているということも指摘されている。

2. 日本における宗教概念について

しかし、そのような宗教概念は宗教学における宗教の学問的な捉え方とは異なる点に留意が必要だと思われる。

宗教学では、確かに、普遍的に受け入れられている定義がないどころか、宗教が単なる西洋出自の（具体的な歴史を持った）概念（思考の産物）であるか、実在する現象であるかという論争さえ長年行われ、近年も激しさを増している。つまり、これは、分野の主要な研究対象について動かぬコンゼンザスがなされていないということである。

とはいえ、宗教学者の間では、宗教とは必ずしも団体だけのものではない、宗教とは必ずしも体系的で組織的なもののみではない、また、宗教信仰とは必ずしも一宗教の教理のみに限ったものだけではなく、諸宗教の要素を含んだものでもあり得るという共通の認識は存在する。

そういう意味で宗教研究を手掛けようとする日本の心理学者が日本の社会に見られる宗教概念を意識し、それに引っ張られないのは重要であると思われる。

3.「日本人論」という罠

日本の宗教心理学を含め、宗教的にも日本人が「特別である」という言説を目にすることはしばしばある。日本人はほかの民族より宗教的に寛容である、日本ほど諸宗教が平和的に共存する国はない、神道など日本の宗教こそ自然環境を大切にし、エコに対する意識がほかの宗教より高いなどという議論である。このような議論は学術界では「日本人論」（あるいは「日本文化論」）というカテゴリーに分類されることは多い。

本発表で日本における「神」概念や日本人の宗教観はアメリカのそれと異なる部分があることを指摘したが、だからといって、日本人の神概念が特殊であり、日本人の宗教観がユニークであると考えているわけではない。まず、ある特定の国あるいはある文化圏と異なるということは世界で唯一（ユーニク）であるということにはならない。

3.「日本人論」という罠

　動物や植物、風や雷のような自然現象・動物・人間などが神として拝まれることは古くから世界中に見られる現象であり、現代でも日本以外の一部のアジアの地域やアフリカなどで見られる。
「特殊だ」、「特別だ」、「ユニークだ」、これらはすべてだいたい学問的な根拠のない（文化的民族主義と関係している）主観的な評価である。
　そして、宗教の心理学的研究を行う者は上記のような、特定の国あるいは宗教の価値に関する主観的判断を意味し、優越感やナルシシズムを表現するとも捉え得る形容詞を使用する必要はなく、客観的な学問を目指すなら、使用すべきでもない。

まとめ
新たな連携・協働を試みる際に注意すべき点

１）宗教に関する質問紙や尺度を作成する場合は、**日本とアメリカ、東洋と西洋の文化的相違を十分意識し、日本の宗教や文化において培われてきた世界観や価値観を反映した、日本の文化的文脈により適った尺度や質問紙を作成する必要がある（学問的なアメリカあるいは西洋中心主義に気を付けるということ）。**

確かに、計量的研究の場合、尺度の信頼性を確保し、その妥当性を確かめるためには複雑な手順が必要で、時間がかかる。

また、アメリカの心理学専門誌に対して文化的相違点を主張し理解してもらうことも、場合によって、煩わしいやりとりを意味し、多少勇気も要るかもしれない。そのため、日本における宗教を心理学的な立場から正確に捉え、海外に伝える試みは、かなりの努力や工夫が必要であろう。

まとめ
新たな連携・協働を試みる際に注意すべき点

２）日本で一般人にありがちな（宗教イコールキリスト教や仏教のような組織的宗教、及び宗教イコール熱心なカルトないし新興宗教、宗教イコール特定の教団への所属・特定の教理への信仰というような）狭い宗教概念・イメージを離れ、非組織的な宗教や個人のモザイク的な宗教なども研究対象に含めること。

３）「日本人論」あるいは「日本特殊論」の危険性を自覚し、特定の宗教あるいは民族の宗教性に対し価値判断を述べることを避けるように心がけること。

　これらのすべての点は自文化中心主義と関係しており、宗教学者と心理学者の密接な連携・協働によって克服し得る（あるいは、少なくとも、部分的に解消しうる）であろう。

参考文献

1. ムスリン・イーリャ『近年の北米心理学理論における死と宗教―宗教学・死生学の立場から』（博士論文）、2015年。

2. 阿満利麿『日本人は何故無宗教なのか』、ちくま新書、1996年。

3. 星野靖二「日本文化論の中の宗教・無宗教」、西村明編 『いま宗教に向き合う２―隠される宗教、顕れる宗教―』、187-203頁、岩波書店、2018年。